

いま南極は

沈まない太陽にジリジリやかかれての労働に暮れた昭和基地の短い夏も終わり、急速に秋色が濃くなったオングル島周辺では、渡り鳥のアデリ、ペンギンも露岩での子育てを終えて暖かな北の海へ去っていく。真夏の季節のつかの間の雪解けで露出した岩場に新雪が積り、南極らしさの白の世界に戻る。雪解けとともに姿が現した廃棄車両などのゴミの山も再び白い覆いがかけられる季節となってきた。

南極に基地をもつ各国の最大の悩みはいまやゴミ汚染対策である。いまでこそ昭和基地には水洗トイレが十分完備されているが、二〇年以上の前の話だが、基地には大用トイレは発電機のある棟に1か所だけで居住棟にはなかった。面倒な時は海水の裂け目に乗せたカブースの中か吹きさらしの中での落しものとなった。さすがに冬の厳しい寒さには耐えきれず、小用は各棟に完備（？）された不要ドラム缶にホースをつないだだけの通称ションドラ呼ばれたトイレで用を足していた。満タンになると交換してすぐに凍ってしまう時期をみてソリで海に運んだ。直接の落しものは有機物として分解されて自然に戻るがション

ドラは海の底に沈んだままである。いま思えば汚染物質の海洋投棄だったのである。

基地の拡大とともに消費する資材が増え、近では南極観光ブームで訪れる人も多い。山ではゴミ持ち帰りは原則であり南極でも当然である。現在、しらせで運ぶ資材は年に四〇〇トン強で五〇トン程度のゴミが日本に持ち帰られている。半分以上を占めている燃料、食料は消費されるので、この量は最大限に近いゴミ持ち帰りがされていると見てよい。

秘境南極での環境保護は愁眉の問題である。遅ればせながら各国とも本腰をいれはじめ南極条約加盟国が環境保護に関する議定書を採択したのが一九九一年。二六カ国のなかで批准が遅れているのが日本とロシアの二国だけで環境先進国としてなさない姿である。

今年になってやっと国内法案が国会に提出される段取りまで進んだという。環境保護団体グリーンピースの報告として南極大陸の縁にせりだしている厚さ200メートルほど棚氷の一部が崩壊して海面が姿を現し地球温暖化が進んだ証拠と報道している。オゾンホールとともに広い意味での地球の環境問題が極地に現れはじめたのだろうか。